平成 31 年 3 月号　№509

なかま

発　行
佐倉市立中央公民館
編　集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鏑木町 198-3
電話（043）485-1801

東京散歩　妙寿寺---------- 田島　健次
深いい・・・話---------- 櫻井　英樹
我が心の故郷---------- 宍戸　廣美
サンクチャリー・オブ・トゥルース　遠藤　道雄

フェルメールに魅せられて

関　とも子

オランダが生んだ３大画家の１人、フェルメールの作品展が昨年秋から上野の森美術館で４ヶ月に亘り開催された。今回は特別に日時指定入場制であった。フェルメールの作品が初めて日本で展示されたのは、１９６８年。レンブラントとオランダ絵画巨匠展の中での１点のみで、それから48年間に20点展示されている。

今回は初来日３点を含む９点が展示された。判明している彼の作品は35点と言われ、現在オランダ国内に７点、その他は欧米11都市の美術館等に所蔵されている。残念なことに盗難により行方不明の作品が１点あります。フェルメールは43歳で亡くなりましたが、因みに37歳で亡くなったゴッホは素描画を含め８６０点の作品を残しています。

フェルメールの作品の特徴は、29点が室内画であり、ほとんどが風俗画です。当初は、宗教画、歴史画を描いていましたが、２点しか残されていません。風景画も２点のみです。有名な「真珠の耳飾りの少女」はトローニーと呼ばれる作品で、肖像画とは異なりモデルを特定せずに描かれた人物画で、もう１点「少女」があります。この「真珠の耳飾りの少女」の作品に使われている絵の具は、ウルトラマリンブルーとよばれる鉱石ラピスラズリを砕いてオイルとよく練り合わせて造った物でとても高価な物でした。フェルメールはこの色を好み、「牛乳を注ぐ女」にも使っています。又、「天文学者」と「地理学者」に描かれている男性が着ているものは、東インド会社を通じてもたらされた日本の着物で「ヤポンス・ロック」と呼ばれたものです。

フェルメールは、構図に窓から差し込む光とモデルの立つ場所を決め、光と影の効果を考えて色の配分をしています。ステンドガラスの窓、黄色のガウンを着た女性が何度か登場しています。

17世紀のオランダは黄金時代。貿易や産業が発展してオランダ人の生活も豊かになり、家に絵を飾るゆとりが出来、宗教画から人々の暮らしの様子を描く風俗画がはやり始めました。楽器を奏でている様子や手紙を読んだり、書いたりする姿が描かれています。又、作品の大きさも普通の家に合わせて少し小さくなっています。

フェルメールの死後、作品を含め忘れられていましたが、19世紀になって美術雑誌にフェルメールに関する論文を書く人が現れ、再び注目されるようになりました。オランダ以外の欧米人からも作品を欲しがられるようになり、現在に至っています。

（編集委員）

東京散歩　妙寿寺

妙寿寺は東京都世田谷区の千歳烏山駅北の寺町通りにあるお寺です。関東大震災で深川のお寺が壊され、復興のためこの地に最初にやってきました。寺町通りは震災で倒壊した都心の寺の再開発になりました。

新緑の頃、住職の好意で客殿を見学させていただきました。ここは区教育委員会や住職の努力で移設元や時期が明確になっています。

二階建ての外観は旧堀田邸や豪徳寺書院に良く似て、明治37年に建築された鍋島直和邸の一部でした。

基礎は佐倉の旧堀田邸同様ボルトナットを使っており、釘隠しはなかったが、軒の丸太や1間半の床の間など同一でした。

鍋島直和は堀田正恒の3歳上の兄で肥前蓮池藩主鍋島直柔の長男で現在の乃木坂の国立新美術館がある屋敷で成長しました。結婚するに当たり父直柔は明治37年に狸穴に新居を建て、松平不昧の玄孫を娶りました。

昭和になり、ロシア大使館の新設の話が起こり、狸穴の直和邸に立ち退きが起こります。昭和4年に震災で客殿を失った妙寿寺に檀家総代の東京大学建築学部の内田教授が移築をしたのです。

豪徳寺の堀田邸移設と同時期昭和4年に妙寿寺も移設され、関連が興味深い。

狸穴の兄直和邸では兄弟はよく会い、家族音楽会や欧州からの来客音楽会などを催し、正恒もチェロを弾いている写真が残っている。直和邸の一部は音羽護国寺の社務所にも移築されている。

秋は境内の紅葉も素晴らしく、近隣寺院も加え、歴史散歩でもいかがでしょうか。

（宮ノ台　田島　健次）

深いい…話

海洋生物学では太陽光が乏しく、光合成が出来なくなる水深２００㍍より深い海を深海と呼ぶそうで、その深海３００から８００㍍に生息する金目鯛・阿候鯛（別名メネケ）釣りを時々チャレンジしている。

阿候鯛釣りは胴付け仕掛けに10本から20本の針を巻いて底に落とし、絡まないようにしながら深い所に住む御魚ちゃんに話しかけることから始まる。

竿先を集中しながら、「美味しい餌ですよ、食べてごらんなさい」とやさしく話しかけ、竿先の微妙な当たりを見定め、竿先が微妙に揺れた時、一番下の針に食べたと考え、次の二番目の針にかけるべく、潮の流れを気にしながら糸を送り出すが、何㍍出すかはその時の感である。上手くはまり２本目の当たりがあり、３本、４本と針に順次食わしたときは最高である。

船長の合図で順番に10分程度かけて電動リールで巻き上げてくるが、巻き上げ途中は糸が切れないか、魚が外れないか、途中サメ・イルカに食われないか、ハラハラ、ドキドキの時間である。

あと残り70㍍程度で急に軽くなる。あれ、魚が外れたか？　いや違うのである阿候鯛２から５㌔の魚が海面にプカ、プカッ、プカと、順次浮いて赤い提灯行列のようになったときは、誰もが歓声を上げてしまう。魚を船に引き揚げるときは最高な笑みが自然に出る。

今は資源が枯渇してしまい、幻の魚となり赤い提灯行列を見ることができない。

なお、これは深いい…眠りの中での夢の話である。

（西志津　櫻井　英樹）

我が心の故郷

今から70年前にタイムスリップしてみよう。私はまだ小学低学年の頃だった。煙たなびく吾妻山の麓から湧き出た水が、せせらぎとなり、いくつかの小川と合流して阿武隈川となって太平洋に流れてゆく。

春の雪解けは早く、3月の中頃になるとうっすらと地肌が見えてくる。裏山にはマンサクの花が咲き、梅の香りにのって野鳥が集う。山畑にはモモの花が咲き、二毛作の菜の花が一面に咲きほこり、遠く山裾まで続いている。その間にピンク色のレンゲ草畑の折りなす二色の風景は、今でも私の胸に焼き付いて忘れることはありません。

4月に入るとまもなく、真綿のようなふんわりとしたリンゴの花が咲き始める。（咲き始めは桃色だが満開には真白になる。）

阿武隈川にそそぐ小川には、サケの稚魚がキラキラと朝日に輝いていた。卵を腹いっぱいにかかえた沢蟹がまだ寒いのか巣穴にもぐりこんでいる。

やがて桜の季節がやってくる。これが東北の春の訪れなのだ。

野山にはエビネや、ショウジョウバカマ、アズマイチゲなど沢山咲いていた。

地形的には、奥羽山脈と阿武隈高地に囲まれている盆地のため、夏はかなりむし暑い。

アユやヤマベ、うなぎやモクズ蟹など川でとれるものは何でも捕っていた。アユの梁かけや投網にも挑戦してみた。

東北の秋はツルベ落しのごとく早く、山々はまぶしいほど赤や黄色に染まる。

雪の量は思ったより少なく1㍍にも満たない。冬はもっぱら来春の農作業の準備にあけくれる。故郷の思い出は語りつくせない事が沢山あるがこの辺でペンを置きます。

（染井野　宍戸　廣美）

サンクチャリー・オブ・トゥルース（タイ国　パタヤー）

数年前、出張中の休日を利用してリゾート地として有名なタイ国パタヤーにある施設、サンクチャリー・オブ・トゥルースを見学しました。この施設は、独特な形をした木造巨大建築です。その高さは105㍍、幅は約100㍍あり、釘などを一切使っておらず全て木組みだけで、海岸に建てられています。

この建物は、タイの大富豪が1981年に建設を始め、彼の死後も完成を目指し、現在も建設作業が続けられています。どこかで聞いたことのある話だとは思いませんか？そうです、規模は小さいですが、スペインのバルセロナにあるサグラダ・ファミリアを連想します。建物は外から見るだけでなく、内部に入ることができます。平面で見ると十字型をした形の建物で、十字が交差する中心部分に塔が建っています。外部および内部のほとんど全面に、おびただしい数の木彫がほどこされており、いつまで見ていても飽きません。木彫り像は建物同様に彩色がされておらず、すべて無垢のチーク材で統一感があります。仏教・ヒンドゥー教の神々が建物全体を飾り、インド、中国、カンボジア、タイの哲学を混ぜ合わせた独自の思想を象徴しているそうです。

パタヤービーチロードのレストランで、シーフードと冷たいビールで乾杯してから帰路につき、充実した一日でした。皆様も機会がありましたら訪れてみてはいかがでしょうか？

（山王　遠藤　道雄）

３月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の２ページと３ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。**「趣味」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」**など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650 字（13 字×50 行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館　TEL: 043-485-1801　FAX: 043-485-1803
〒285-0025 佐倉市鏑木町 198-3
E-mail: chuo-public@city.sakura.lg.jp
URL:http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

『なかま』は佐倉市民カレッジの学生と卒業生で構成される編集委員が編集し、市民カレッジ情報コースの卒業生が文字入力を行っています。

さくら道

「行不由径」（論語）「行くに径に由らず」と読む。

径の方が早いし、景色も良い。しかし行き止まりがある。大道は遠回りに見えても、決して迷わないという意味だ。

佐倉に移り住み既に35年が過ぎた。転居当時は、道路も未舗装が多く、畑の可憐な草花を見ながらのんびり歩いた懐かしい記憶が甦る。

今では、住宅や商業施設が立ち並び道路が整備され近所に畑の面影も見えない。便利さが優先され、季節の移ろいを感じる風景が消え行くのは、一抹の寂しさを感じる。

市民ハイキングに参加し、先輩方は良くぞこれだけの小径を見つけられたと感心する。仲間と語らいながらの愉しい時間である。健康と心のゆとりがもたらす宝物と言えよう。

（橘高　芳敬）

あとがき

ここ数年俳句ブームのようである。テレビでは「プレバト」という趣味を競い合う番組で俳句が一番人気である。私には俳句に関する素養はないが、五七五の十七音でつくる調べが心地良く、女流俳人の解説を聞いていると、なんとなく俳句がどういうものか分かる気がして、毎週番組を楽しんでいる。

俳句といえば、明治以降では正岡子規が思い浮かぶ。子規が生まれた松山では町中に俳句ポストが置かれ、また、高校生が競う「俳句甲子園」があると聞く。

先日、本屋で俳句歳時記を手に取り眺めてみたが、春の季語だけでも数えきれない多さで、これは難しい。そこで季語を入れないで詠んだ俳人、種田山頭火の一句

〝こころつかれて山が海が
うつくしすぎる〟

私も少し疲れているのかな、皆さんも一句どうですか。

（土田　幸雄）